

## 女性を支援するということ

須藤 八千代

知人に、歌人の故河野裕子の『たとへば君』を読んでいると眩くと、そこに出てくるエッセイ『みどりの家の窓から』を貸してくれた。その本に、きちっと畳まれた古い新聞の切り抜きが挟まっていた。その端に「72、10、6」とメモがある。43年前だ。『サンダカン八番娼館』を書いた山崎朋子が「底辺に生きる女たちのこと」という題で書いている。

山崎は娼婦だけでなく農婦、炭鉱婦など底辺に生きた女性の悲惨ともいえる生きざまに強い関心を持ち、それを聞き取り書き残す義務があると語っている。女性の悲劇は日本だけにとどまらない歴史的ダイナミクスによってもたらされているからである。また決して昔のことではなく、山崎と同世代の女性ということにも衝撃を受けている。

ただ、この4段組みの文章を終わりまで読んでも、「暴力」あるいは「女性への暴力」という言葉は出てこない。女性が暴力の被害者であるというグローバルな表現はまだ新しいということがわかる。しかしそこに書かれた事実は、暴力という言葉を超えたエピソードで充満している。そして「苦しみを他人に話しても理解してもらえないという認識があるため、その口がきわめて重い」という。苦しみが大きいほど、それを他者に伝えることは難しい。苦しみと釣り合う言葉を探す難しさである。彼女たちの苦しみは人の感情や行為が与える手荒さや苦痛であり、暴力という訳語では掬いきれない。

言葉は女性と支援者の間のコミュニケーションを成立させる重要な道具である。「なんでおれらがほんまなことしゃべらなならん義理があるか」という老女に、研究者である山崎は自戒したという。言葉だけではわからない。しかし言葉がないと支援の入口が見えない。そのジレンマが支援者の感性を鍛える。言葉にならない世界に本当のことがあるとすれば、支援することは極めて難易度の高いものである。



### PROFILE

すどうやちよ：愛知県立大学名誉教授。大阪市立大学人権問題研究センター特別研究員。NPO 法人ウイメンズ・ボイス副理事長。1970年から2001年まで横浜市ソーシャルワーカー。その後、愛知県立大学教員。『婦人保護施設と売春・貧困・DV問題—女性支援の変遷と新たな展開』（明石書店、2013）、『フェミニストソーシャルワーカー福祉国家・グローバルイゼーション・脱専門職主義』（レナ・ドミニリ著、明石書店、2015）などの著書、訳書がある。